

第3回鈴鹿市総合計画審議会 議事要点録

■日 時：令和5年2月20日（月） 13：00～14：45

■場 所：鈴鹿市役所 本館6階 庁議室

■出席者：・委員16人

（敬称略）	磯部 友彦	（鈴鹿市都市計画審議会 会長）
	伊藤 京子	（鈴鹿市社会福祉協議会 次長）
	尾崎 郁夫	（鈴鹿市医師会 会長）
	小田 栄次郎	（ホンダモビリティランド株式会社 取締役 鈴鹿サーキット総支配人）
	杉山 範子	（鈴鹿市環境審議会 委員）
	富井 利博	（鈴鹿市スポーツ協会 事務局長）
	西村 伸吾	（鈴鹿地区労働者福祉協議会 会長）
	長谷川 玲子	（鈴鹿市男女共同参画審議会 委員）
	服部 高明	（鈴鹿市私立幼稚園協会 会長）
	古戸 沙弥	（公募市民委員）
	松蔭 康博	（鈴鹿市教育委員会 委員）
	松田 裕子	（三重大学 学長補佐）
	水野 克則	（鈴鹿市自治会連合会 会長）
	森 隆裕	（三重県デジタル社会推進局 デジタル改革推進課長）
	矢田 和夫	（鈴鹿市漁業協同組合 代表理事組合長）
	吉崎 美穂	（鈴鹿国際交流協会 専務理事）

※欠席4人

岡田 篤典	（鈴鹿市PTA連合会 会長）
田中 彩子	（鈴鹿商工会議所 会頭）
平子 伸	（鈴鹿農業協同組合 専務理事）
水木 千春	（鈴鹿市防災会議 委員）

・事務局

政策経営部長 森 健成

参事兼総合政策課長 奥西 真哉

総合政策課副参事兼政策グループリーダー 岸本 領介

総合政策課政策グループ副主幹 志村 祥一

総合政策課政策グループ副主査 大河内 雅之

■傍 聴 者：1人

■内 容：以下のとおり

1 開 会

- ・ 事務局から開会の挨拶。
- ・ 第1回及び第2回欠席者の挨拶。

2 議事

(1) 次期鈴鹿市総合計画の構成等について

【事務局】

- ・ 資料2に基づき説明。

【磯部委員】

- ・ 今回4つの大きな方向性を示されたが、言葉の意味を深く検討した方が良いと思った。資料2の「次期鈴鹿市総合計画の構成等」に「市民」という言葉が出てくるが、市民の中には「企業」や「団体」という意味も含めていただきたい。
- ・ 4つの大きな方向性の中の「持続可能なまちづくりに向けた計画」において、「SDGsの目指す『誰一人取り残さない』社会を実現する」とあるが、地域別に見た際に良い地域・悪い地域が出てくる可能性がある。地域的にアンバランスが大きく出るとあまり良くないと思うため、地域の特徴を踏まえて「誰一人取り残さない」ということを考えていただきたい。
- ・ それに対し、「重点的に取り組む内容を明確にする」と、非常に難しいことをやろうとしている。あまり重点的な取組の達成のみを追い求めてしまうと、「誰一人取り残さない」に逆転してしまうと考えられる。そこが難しく、重点的に取り組む内容を作らないといけないことは分かるが、それだけに走ってはいけないだろう。

【事務局】

- ・ 「市民」に加えて「企業」も、という御意見をいただいたが、地域づくりにおいて多様な主体が重要であると認識している。NPOや企業、地域づくり協議会など、あらゆる主体を含めて「市民」と使わせていただいている。

- ・ 地域的に「誰一人取り残さない」という観点は非常に重要である。鈴鹿市は海から山まで多様な23の地区で成り立っているため、それぞれの地区の特性・特色を生かしながら、取り残さないための取組を考えたい。
- ・ 重点的に取り組む内容については、計画としてメリハリのある形で、様々な分野の取組をお示しした上で、特に4年間で力を入れて取り組むという観点で例示をし、市民の方にも分かりやすい計画にしたいと考えている。

（２）鈴鹿市総合計画2031基本構想骨子案について

【事務局】

- ・ 資料3に基づき説明。

【西村委員】

- ・ 評価について、「みんなの目標」で達成度を測るということであるが、市民へのアンケートの結果のみで達成度を測るのか。例えば、人口や出生率などの客観的な数字データは見ていかない予定か。4年に1回のアンケートとなると、4年経たないと何も見えないことになるため、どのように考えているか御教示いただきたい。

【事務局】

- ・ 第1層の基本構想の評価については、みんなの目標にある状態に対して、市民が満足しているのかどうかを4年間の取組を例示するなどしながら、4年に1回アンケートを取って市民満足度により測りたいと考えている。第2層以下の「基本計画」と「実行計画」においては、毎年成果指標として様々な数字のデータを取りながらPDCAを回したいと考えている。特に第3層の「実行計画」では具体的な活動指標を設けるため、毎年見直し・改定して進めていくというような形で考えている。

【松田会長】

- ・ 現計画の評価では、アンケートを毎年とっているが、4年に1回に変えた理由はあるか。

【事務局】

- ・ まず、基本構想の指標については、市民の皆さんと一緒に目標達成を目指していくことをはっきり分かるような形にするため「みんなの目標」という名前にさせていただいた。あくまで中長期的な指標であり、その評価結果は、後期基本計画へ反映させるという位置付けで考えている。前期基本計画の4年間の中で、1年目、2年目と事業をし、3年目、4年目でやっと花が咲くような事業もあるかと思っている。そういった中で、「4年間頑張ったか」という観点で、第1層の基本構想の部分は評価いた

だきたいと考えている。ただし、経年の変化や、ある程度どのような状態かを把握する手法として、例えばSNSなどを利用しながらスポット的なアンケートを取ることも検討の余地があると考えている。原則としては、後期基本計画に生かすために、4年に1回満足度を測るというような構成・構造にしている。

【吉崎委員】

- ・ 「実行計画」は毎年見直しをされるということで、現計画の成果指標も市ホームページなどで公表していることは把握しているが、それだけだと市民の方に見ていただく機会が少ないと思うため、どのような方法で、こういったタイミングで公表していくかも検討した方が良い。「市民と一緒に作り上げていく」ということであるため、市民に理解してもらえそうな場面を作っていくことができれば、より良いと感じた。

【松田会長】

- ・ 吉崎委員の意見はとても大切なことと考える。「みんなで作り上げていき、みんなで共有して、みんなの目標にして、一緒に取り組んでいく」という、とても美しい計画の骨子案であるが、第2回審議会で岡田委員から「誰も総合計画を知らない」といった意見もあった。市民、企業、NPOなどの皆さんと一緒にこのビジョンを共有していく工夫や仕組み、場面を作っていくという考えはあるか。

【事務局】

- ・ 来年度にかけて計画の策定が進んでいく。素案段階でパブリックコメントなどを経て、最終的に市議会の議決を得たら、大々的に広報を打ちながら市民の方に共有したいと考えている。また、冊子についても分厚いとなかなか読みにくいと思われるため、概要版のような分かりやすいものを作り、例えばそこに二次元コードを掲載することによりスマートフォンからもアクセスできるようにすることを考えている。また、骨子案に至るまでに、各地域づくり協議会、学生等から御意見をいただいた経緯があるため、今回、骨子案としてまとめさせていただいたものについてもこれからフィードバックをしていこうと考えている。今後、みんなの目標を広く知ってもらうための取組を考えていく。

【水野副会長】

- ・ 吉崎委員の意見にもあったように、立派な計画ができて市民に知ってもらえなければ意味がない。総合計画2023の成果についても、どのようなものであったか、それも広く共有していただきたい。それを踏まえた上で次の4年、8年になっていくと思うが、28地区の地域づくり協議会で定期的に進捗状況などを共有する中で、地区によって地域性があるため様々な問題点がみられる。そういうのを市民の声として吸い上げ、

共通の問題・地域独自の問題といろいろとあると思うが、その中で採用できるものは採用するなど、配慮いただきたい。

- ・ 4つの大きな方向性に『デジタル化』を前面に打ち出した計画」とあるが、具体的にどのようなことをデジタル化するのか教えていただきたい。国の施策でDXやGXなども出ているが、市民が理解できるような説明の仕方をしないと、また理解されないことになると思う。また、SDGsについても言及されているが、いろいろと取り組んでいる企業や地域づくり協議会もある中で、連絡や情報交換において市役所は縦割りの部分があるため、各分野に詳しい部署と横の連携をもう少しとっていただき、幅広い意見の交換をしていただきたい。地域でいろいろな問題が起きた際に、地域協働課に相談するが、それだけでは分からないことが多い。建築土木関係や教育関係など様々な問題があるため、連携を持てるような横のつながりをもう少しとっていただきたい。

【事務局】

- ・ 総合計画2023の成果の報告について、来年度で計画期間が満了するため、その後速やかに総括を行っていきたいと考えている。次期総合計画の策定に当たっても、中間総括を踏まえて行っており、出てきた課題というところで、例えば公共交通などいろいろな部分があったかと思うため、そこについてもしっかりと手当てしていきたいと考えている。市民の理解も少ないという中で、次期総合計画については、できるだけ分かりやすくシンプルな構造にしたいという思いがあり、その中でできるだけ市民の方に見ていただけるような計画・冊子にしていきたいと考えている。
- ・ DXについては、医療や福祉、公共交通、窓口部門などあらゆる分野でデジタル技術を活用した取組の検討の余地があると考えている。例えば健康面で、糖尿病の予防プログラムなどでウェアラブル端末を活用して自分の健康状態が見える化できるようになってきた。そういったデータを医療や福祉の分野で活用するなど、デジタルは若者向けと思われる面もあるが、実は高齢者や障がいをお持ちの方に優しいツールである。タブレットの使い方を覚えてもらうだけで、足が不自由な方などの障がいをお持ちの方でも多様なサービスが受けられる時代になってきている。そういった観点で、デジタルを活用して市民サービスの向上につなげたいと考えている。

【森委員】

- ・ 将来都市像の「ひとがつながりDXで未来を拓く」の部分について、すごく良いと感じた。デジタルだけだと少し冷たい、優しくないという印象を与える場合があるため、頭に「ひとがつながる」ということをしっかり書いていただいておりますのはすごく良い。
- ・ これまで出ている意見の中で客観的な指標をどうするかという話があったが、国のデジタル田園都市国家構想の関係で作られた、一般社団法人スマートシティ・インスティ

テュートの「Well-Being City指標」では、客観指標や主観的な指標を全国の自治体のデータをオープンデータとして公開しており、こうしたものも参考にさせていただきながら検討いただければ良いと思う。

- ・ 4つの大きな方向性の「重点的な取組を見える化・魅せる化」することについて、どうやって見せていくかという部分で、最近よくデータ活用の中で「ダッシュボード」が使われている。WEB上の情報提供という点、PDFで静的なグラフが載っているだけのものがほとんどで見やすいとは言えないが、ダッシュボードを使用すれば、例えば人口を選択すると自動的にグラフが表示されたり、地区別のデータを選択するとグラフが表示が変わるといった、グラフを触りながら視覚的に見せることも技術的には可能である。それも、新しいツールを使えば意外と簡単にできる。ダッシュボードは分かりやすいため、特に学校など教育の分野で使っていただくと子どもたちも学びやすいと思う。黒部市においては、社会福祉協議会がSDGsに関連したダッシュボードを公開しており、そういうのも面白いと思う。
- ・ 「DXをどういった分野に活用するか」については、ありとあらゆる分野だと思っており、三重県庁内でもDXに関係ない分野はないという認識である。特に、骨子案に記載のある行政手続については、一丁目一番地でやっていただくことだと思う。最近国が「書かない窓口」を全国に広めようと、標準的な機能を決めて、それを一般のベンダーが提供し、その中から自治体の使いやすいものを選んでもらうというようなサービスを今年の夏頃にスタートすると聞いている。電子申請だけだと使える人と使えない人で差が出てくるため、来庁された方を待たせず、何度も同じことを記入させない「書かない窓口」を鈴鹿市でも是非推進していただきたい。

【松田会長】

- ・ 一言でDXといっても、自治体の組織内でやっていくもの、市民の窓口対応などに関係するもの、地域で活用していくものなどいろいろなタイプのものがあると思う。DXやデジタル化と言っているだけでは、その辺が見えてこないため、どういった場面で使っていくのが良いのかを具体的に描き、市民がイメージできる形にしていきたい。
- ・ DX関連の用語はカタカナが多く、高齢者等が理解しにくいものが多いと思われる。デジタル化することで高齢者に優しいという側面もあると思うが、そのためにも分かりやすい説明に言い換えることが大切。行政用語を使わずに、相手に合った説明の仕方を工夫する必要がある。そのためには、物事の本質を深く理解していないといけないため、頑張って取り組んでいただきたい。

【伊藤委員】

- ・ 8ページに「本市の未来を担うすべての子どもの権利が保障され」とあるが、社会福祉協議会の取組の中で、自身の置かれている状況が厳しい子どもがいることを日々相談

などで目にしている。そういう子どもたちがいることを少しでも認識してもらえるように、空白の部分に4つの基本的な子どもの権利を具体的に示していただくと分かりやすくなるのではないか。

【事務局】

- ・ 御指摘いただいた部分について、注釈を入れることを検討する。

【松嶋委員】

- ・ 5ページに「「鈴鹿らしさ」を創造」という表現があるが、こういった状態を鈴鹿らしいと考えて、この表現を打ち出しているのか。「鈴鹿らしさ」という表現は、分かりやすいようで実はボヤっとしており明確にならない部分があるため、定義をした方が良いと感じた。
- ・ 17ページ、「8 計画の推進のために」において、「人口減少対策の方向性」、「SDGsとの関係性」、「協働」の進め方」という3つの項目があるが、これらは、6つのビジョンに共通するベースとなるべき方針・考え方という位置付けか。
- ・ 4つの大きな方向性の「「人口減少対策」「デジタル化」を前面に打ち出した計画」について、「人口減少対策の方向性を示します。また、本市の魅力や行政サービスの更なる向上と地域課題の解決につなげるためのDXに向けた取組を明確にします。」とあるが、人口減少対策というのは、ここの文言から捉えると、人口が減少したことによって生じる様々な課題についての対策に取り組むという受け止め方ができるが、そもそも「人口が減らない、増やしていく」というところに向けた施策はここに織り込まれていないという理解で良いか。

【事務局】

- ・ 鈴鹿市の恵まれた自然環境や、伝統ある歴史と文化など、これまでに築き上げてきたものを守りながら、新たに独自のものを生み出し、先進的な取組として鈴鹿市から発信していくことを「「鈴鹿らしさ」を創造」と表現している。
- ・ 「計画の推進のために」の3項目については、様々な分野がある中で横断的に取り組む必要があるものと整理している。人口減少、SDGs及び協働はある程度ベースになってくるような部分があると考えているため、それをしっかりと示し、共通認識を持って、第2層の「基本計画」以下につなげていくという意味合いで、「計画の推進のために」として取り上げている。
- ・ 人口減少対策については、人口を増やしていくという取組を含めており、それに加えて人口減少の社会にも適応していくという二面性があると考えている。人口を増やしていく、人口を減らさないという取組の中で、これまで議論してきた自然減・社会減に対する対策も講じながらやっていきたいと考えている。具体的なところは素案で示して

いく予定である。

【尾崎委員】

- ・ダイレクトに「少子化」という言葉を使っても良いと思う。少子化が問題になっていることは皆分かっているため、市役所は全面的に出していただきたい。
- ・政策の市民への周知について、例えばコロナ禍における医療機関の関わり方やワクチンの提供についてもなかなか市民に周知できなかった。市役所に工夫をして周知してほしいと要望し、広報や市ホームページに掲載してもらったが伝わらなかった。もう少し工夫する余地があり、地域づくり協議会などに市の職員が出向き、生の言葉で訴えていったらどうか。そういう手間は省いてはいけないと思う。
- ・高齢者施策でいうと、独居老人など孤立した高齢者が問題となっている。高齢者はインターネットの利用が得意ではない方が多く、また、視力の低下により広報を読むことも容易ではないため、デジタルのシステムから外れていってしまう。そういった人たちへの具体的な対策を検討してほしい。

【事務局】

- ・「少子化」をストレートに表現するなど、伝わりやすい文言については素案で検討したい。
- ・地域づくり協議会などに足を運んでいくということも大事であると認識している。そのためには業務等を合理化・効率化しながら、マンパワーを回していくなど様々な手法があると思うため、できるだけ市民の方に伝わるような仕組みづくりや、地域に根差した活動といった形で展開できれば良いと思う。

【水野副会長】

- ・DX化というのは事務处理的・機械的な処理をし、省人化につながることは非常に良いと思うが、尾崎委員の発言にもあったように、高齢者はスマホからも取り残されている方が多くみられる。そういう方に対してはマンツーマンと言うか、アナログ的な方法で接する必要があると思う。現に私の住む地域のことであるが、7年程前まで500世帯ある中で独居老人は5世帯のみであったが高齢化が進み、今は20世帯まで増加した。このままでは10年後には50世帯を超えることが考えられる。独居老人を見守ってくれるのは民生委員や自治会、地域包括支援センターなどであるが、追いつかなくなることが懸念される。DX化できるところはDX化でやっていただき人を減らす。その代わりにDX化が難しいヒューマン的な部分はもう少し人材を投入していただきたい。また、ある程度ルールがしっかりできてくれば良いのだが、例えば徘徊老人が出たら右往左往している状態だ。各地区で模擬試験的なこともやっているが、いざ本番となるとなかなか見つからない。中には亡くなられる方もみられる。まちづくりの中の一つの課

題として含めていっていただきたい。

【松田会長】

- ・ デジタルとアナログは二項対立ではないと思う。個人的には今もこれからも地域づくりは基本アナログだと思っている。その中で技術や地域、使う人に応じてデジタル化できる部分を検討していくのが良い。何でもかんでもデジタルにはならないと思う。同様に、本日最初に磯部委員から意見があったが、行政と市民という言葉が多用されており、行政の文章を見ていると、行政と市民の二項対立に見えがちで、行政文書は一緒にやっていく感が少ない。今回の骨子案では、行政は全部やっているが、市民は「これからこれだけやっていかなければならない」というようにも見られてしまうかもしれない。市職員も市民でもあるため、共に鈴鹿市を作っていくという意識をより強く持っていただけると良い形で進めていけるのではないかな。がっちりDXを追求するだけでは、多分良い形では進まない。共創の意識が高まっていくことが望ましい。

【杉山委員】

- ・ 資料3の表紙に笑顔のマークが入っていたり、あえて「みんなの目標」という言葉を使っていたりするあたりがすごく良いと思った。
- ・ 気候変動の観点で言うと、温暖化を防止するための対策のみならず、気温が上がってしまうのは避けられないため、それに適応していくというアプローチがある。その際にまず考えないといけないのが、その地域にどのようなリスク・弱点があるのかを評価するのが第一歩となる。それを評価した上で、どこから優先的に取り組んでいかなければならないかという観点で対策を組み立てていくというのが適応策になる。そう考えたとき、「最高に住みやすいまち」をつくっていくというアプローチは大事であるが、逆に住みにくい部分を減らしていく必要がある。実際、鈴鹿市にどういった住みにくさがあって、今後、少子化や様々な問題が進んでいく中で、それが顕在化していくのかという部分をあらかじめしっかりと洗い出し把握する。そこをカバー、無くしていくようなアプローチも一つ考えられるだろう。そういったときに「みんなの目標」に、そうした項目がふさわしく入っているのかどうかをもう一度確認できたら良いと思う。
- ・ ビジョン4で「環境にやさしく」という言葉が使われているが、違和感がある。「環境」対「人間」のように感じられる。「環境に対して人間が優しくする」のではないと思うため、「環境と調和する」や「共生する」といった表現にした方が良いと感じた。
- ・ 「SDGsとの関係性」について、SDGsは2030年がゴールであるため、鈴鹿市としても2030年にふさわしい何かしらの明確なゴール、指標みたいなものを掲げていくのか、どのように進めていかれるのか伺いたい。

【事務局】

- ・ 住みにくい部分をなくしていく、鈴鹿の弱点を克服していくという観点での「最高に住みやすいまち」に向けての取組は必要だと認識している。市政アンケート調査結果などを踏まえながら高い目標を掲げてやっていきたい。
- ・ ビジョン4の「環境にやさしく」という表現について、「調和する」や「共生する」といった表現の方が良いという貴重な御意見をいただいたため、表現の修正を検討したい。
- ・ SDG s について、基本計画で関連した取組を示したいと考えている。また、市政アンケート調査でSDG s の認知度が低いという結果が出ているため、SDG s そのものの認知度を引き上げる取組がまずは必要と考えており、市民一人ひとりの継続した取組が大事であると思っている。それぞれの主体が自主的な取組をしていく中で、住み続けられるようなまちになるのかなと考えている。今年度は、市制施行80周年記念事業として、「みんなで創ろう！レガシー事業」という取組をした。市内の小中学校でSDG s をテーマにいろいろな取組をしてもらい、その中で、未来を担う子どもたちが自分事として問題意識を持ってもらうことが大事と感じた。総合政策課の職員も小学校の授業でSDG s の話をさせてもらったり、市民の方とワークショップをしたりという取組を今年度もやってきたため、この計画を機にブラッシュアップしながらより良い取組につなげていきたいと考えている。

【杉山委員】

- ・ 子どもへの環境教育は大事であると思う。一方で、2030年まで7～8年と差し迫った状況であるため、子どもたちがいろいろなことを選択したり、モノを買ったり、選挙ができたり、そういう年齢になるのはまだ先と考えたときに、子どもへの環境教育はもちろんだが、大人が変わっていかないといけない。その点で、魂の入った、表面的な飾りではなく、ちゃんとそれを達成するための施策にこの計画がなっていくのかということをしつかり本気スイッチを入れて取り組んでいただきたい。

【松田会長】

- ・ この辺りは頭が痛いところなのだろうとお察しするが、役所の皆さんには本気で頑張っていたいただきたい。

【富井委員】

- ・ 公立中学校での部活動改革として、段階的に地域のスポーツ団体などに運動部を移行する「部活動の地域移行」が2023年度から実施されるが、他市と比べて鈴鹿市は立ち上がりが遅れていた。市長もそれを察知し、4月から準備をしていくと聞いている。当初、国は2025年度までに地域移行を完了させなさいという方針だったものの、ほとんどの市町において、予算がない、指導できる人がいないといった課題があり、なか

なか進まず、先が見えない状態となっていることからトーンダウンしている状況である。しかし、市でどのように取り組んでいくのかということは示さなければいけないと思う。菰野町では本年4月に地域移行を完了すると聞いている。小さな市町であれば割と地域移行はできやすいが、大きな市になってくると、中学校全部のクラブを地域の人々が指導できるかという、現状ではとても不可能だとも思う。当初は教育委員会の教育指導課が先導して取り組み、いずれはスポーツ振興ということで市長部局のスポーツ課に移管されると聞いているため、少しずつでも前進していけるように、素案で今後鈴鹿市がどのように進めていくのか触れていただきたい。

【事務局】

- ・ 前期基本計画の期間中にこの辺の動きが出てくると考えている。市内には2022年4月時点で運動部が111、文化部が39あると聞いている。およそ1校当たり15程度である。鈴鹿市の課題として、運営団体の確保、受け皿の確保、指導者の質・量の確保、部活動数の適正化、費用負担など、複数の課題が絡んでいると認識している。当然、教員の負担軽減も考えていかなければいけない。いずれにしても全国的に議論されているほか、県知事はじめ各市町の首長の方でも議論されているところであり、鈴鹿市も地域の方とも協議をしながら進めていくべきことだと思っているため、基本計画策定の中でも議論・検討していきたい。

【長谷川委員】

- ・ ビジョン6「みんなで支える 自分らしく生きるまち」の中で、人権や男女共同参画、多文化共生、多様性、協働などについて記載されているが、これらは少子高齢、人口減少社会を支える、持続可能なまちを作るための基礎・土台となる理念であると思っている。成果としてなかなか見えにくい部分であるが、しっかりと取り組んでいくことで、人口減少社会を住みやすい社会にしていくことにつなげていっていただきたいと思う。6ページの分野別ビジョンの図において、ビジョン6が他の5つのビジョンに横断的に関わっている図となっており非常に良いと思う。ただ、他のビジョンと比べて非常に優しい色合いとなっているため、ここはもっと強く進めていきたいという意味を表す、強い表現をしていただけるとより良くなると思うため、検討していただきたい。

【事務局】

- ・ ビジョン6は他のビジョンの下支えになるという考えのもと、このような図にした。見せ方については工夫しながら詰めていきたい。

【松田会長】

- ・ 分野別ビジョンの図の配置はこれで良いのか。ビジョン1から番号順に配置した方が

見やすいと感じた。また,ビジョンの番号はどのように決めたのか。

【事務局】

- ・ 市政アンケート調査の重要度評価結果を中心に1から付番しているが,ビジョン間で優劣をつけるものではない。計画の体系上,数字で管理していく部分があるため付番している。各ビジョンはフラットな関係で,ビジョン6がビジョン1から5を下支えする関係になる。それぞれがあくまで関連し合っているところがあるため,そういったところが表現できる図にしたいと考えている。図の配置について検討する。

【磯部委員】

- ・ 鈴鹿市都市計画審議会としてはビジョン4に強い関連性があると考えている。また,ビジョン3の防災分野にも関わってくるだろう。いずれにしても,都市計画審議会が都市マスタープランを作り,詳細な地域の課題に対する計画を作っていく。そこで総合計画としっかり連動させたい。
- ・ 将来都市像の「最高」という言葉が少し気になる。坂道を登っていくと最高地点に到達する。最高地点を過ぎると下り坂である。この計画は,いずれ下り坂に来ることを示唆した言葉なのかという印象を受けるため,個人的には「最高」という言葉は使いたくない。また,地域的に見たときに,近隣市町と比べて最高と解釈されると近隣市町との関係が悪化するかもしれない。最高という言葉が本当に良いのか疑問である。

【松田会長】

- ・ 将来都市像については,恐らくいろいろな意見があると思う。役所の中でどのような意見や議論があったのか,教えていただきたい。

【事務局】

- ・ 市内部でもいろいろと意見があり,「最高ということは一回到達してしまえばあとは下り坂じゃないか,次に何をするのか」,「相当の財源確保が必要ではないか」,「近隣市町との関係はどうなるんだ」などの意見があった。ただ,ここにある最高というのは,決して相対的に順位付けをして1番になるという意味ではないということを念頭に作らせていただいた。また,抽象的な言い方になるが,決して到達点はないという風に思っている。常にアップデートしていくものだと考えているため,常に進化・向上していくという意味も込めて最高という言葉を使わせていただいた。これをどう分かりやすく市民の方に発信していくかというのは今からの課題であるため,その辺も踏まえてこれから検討していきたいと考えている。

【磯部委員】

- ・ 意識の問題として、そういう意識も持ちましょうということであれば良いと考える。

【松田会長】

- ・ ここはぜひ若い方の意見も伺いたい。

【古戸委員】

- ・ 若者の中で行政の支援を受けていると体感している人は少ないと思う。若者は目の前で常に精一杯のため、行政がどのような働きかけをしても、関心を持つ可能性は低いと感じる。そうした中で、「#最高に住みやすいまち鈴鹿」のようにハッシュタグを使用し、SNSでの発信を意識した将来都市像にすることは、SNSが生活の中心となっている若者にとっては関心を持つ可能性が少しでも高まるのではないかと感じた。デジタルを使わない世代から批判があらうことは承知しているが、対面でのつながりやアナログでの手続も考慮した上で、デジタルを中心としている世代にリーチできる政策を考えていくべきなのではないか。

【松田会長】

- ・ 若い人に見てもらうためにはフォローしてもらう必要がある。例えば三重大学でもSNSに力を入れているものの、なかなかフォロワーが増えないし、ユーチューブもなかなか見てもらえない。アップしているだけではそこにあるだけで、どうしたら情報をうまく流通させられるかが課題。特に役所のホームページは情報過多である。なんでもかんでも載っている反面、欲しい情報が探しにくい。発信した情報をどうやって流し、欲しい相手に届けるかなど、何かアイデアはあるか。

【古戸委員】

- ・ 行政の政策などについて、若者は全然興味がないし、ホームページも見にいかないと思うため、例えば「#最高に住みやすいまち鈴鹿」を広めていくためには、歩道橋や商業施設などにスローガンとして掲げて目に入るようにするとか、情報発信すると景品などがもらえるといったイベントを開催し、若者に参加してもらうのも一つの方法かと思う。

【矢田委員】

- ・ 水産業について、当組合は現在140人から150人の組合員がいる。20年前は300人から400人であったため大幅に減少している。温暖化に伴う海水温上昇などを要因に漁獲量が減少したことから、後継者が少ない状況である。しかし近年、DXを活用して伊勢湾の水温や栄養分の状況をLINEですぐに見られるようになり、海苔の成長度合いが分かるようになった。水温や栄養分などが分かるため、状況に応じた対策

ができることから、今年は過去最高の水揚げができそうである。また、昨年からアサリに関するいろいろな取組を行っており、アサリの収穫量が増えたことで事業を受け継ぐ若者が出てきたという動きもみられる。様々な産業分野にデジタルが活用できると思うため、デジタルを活用して鈴鹿市に儲かる産業、持続可能な産業が創出されることが望まれる。

【松田会長】

- ・ 一次産業は環境と密接に結びついており、特に水産については、海の環境は人間が改善することが難しく、農業以上に広い範囲で考えるべき課題に直面している。その中でDX、デジタル化、データの活用、スマート化が進んできている分野でもあり、後継者が減っていく中で、大きく変えていくチャンスがあるという捉え方もできていると思っている。漁業者や農業者には、日々の作業の中でここがこうなったらいいなとか、具体的なアイデアもあると思う。勘と経験で魚をとっていた時代はきっと変わるため、その辺の支援なども考えていけると良いと思う。

【水野副会長】

- ・ ビジョン6について、市の財政があまり潤沢な状況ではないと思う。8年の計画を実行していく上で、新たな財源を確保していく必要があると思うが、亀山市や四日市市のように工場立地が進んでいないのみならず、鈴鹿から出ていく企業もみられる。鈴鹿市は20万くらいで人口で予算が700億弱である。一方、千葉県の同規模のまちで予算が1000億円。ホンダなどの自動車産業や農業、水産業もあるのに、これだけの差が生じている。市自体の経営方針をしっかり定めていただきやっていると、計画を一生懸命考えたのに、いざ実行となって予算不足となってはいけない。

【事務局】

- ・ 新たな財源を確保することは、かなり難しい問題と思っている。人口減少対策を前面に打ち出していく中で、人を増やすとか、広告収入や企業版ふるさと納税、法人税など、いろいろな角度から財源を確保していくことが必要であり、地域全体の稼ぐ力を向上させることが重要である。また、事業の推進に当たっては、財政計画などを見ながらPDCAを回し、評価を行いながら必要な事業に必要な財源を充て、総合計画と予算との連動を図っていく。

【服部委員】

- ・ 保育園において、0、1、2歳の子どもたちがうつぶせ寝で亡くなるのを回避するため、5分ごとにどっちを向いているか確認しないといけないというのがある。ほぼ一人で、専任で行わなければならないため、多くの時間を取られていた。しかし近年、何分間こ

ういう状況だったらブザーが鳴るといった、機械化・自動化が進んでいる。大人が強く歩くと反応するなどエラーは多いが、エラーがあるから使わないのではなく、命を守ることと効率化を考えてデジタルを取り入れていく必要がある。

- ・ 園内での事故や虐待等についての職員への意識調査を私の園では月1回グーグルフォームを活用して行っている。紙ベースでの調査では効率が悪く、アンケート集計ツールなどデジタルの普及のおかげで職員の考えが把握しやすくなった。
- ・ 不審者情報の他園との共有について、これまでは電話をかける必要があり、1日の多くの時間を取られていたが、LINEなどで「当園でこのようなことがあった、こうした状況になっている」というのを一斉に流せるようになり、時間を無駄にすることなく子どもたちに目を向けられる時間が増えた。
- ・ 鈴鹿市では2年程前から勤続3年以上の職員に手当てを出していただけるようになったり、他市とは少し違う取組があり、私の中では評価している。それが、やりがいにつながってってくれれば良いと思っている。人なのでやる気になれば120%出せることもあるし、同じ作業をしても8割の時間で終わってしまうこともある。モチベーションを上げるためにはデジタルも非常に効果的と思っている。
- ・ 共働きの世帯が年々増えている中で、幼稚園や保育園を卒園した子どもたちの受け皿となる施設がかなり不足している。幼稚園や保育園に学童機能を追加することができれば、あまりお金もかからないし、受け皿を増やす効果的な方法であると考えられる。しかし、それをしようとすると、保育のために公費を使って園を建てていることから学童のためにお金を使つてはいけないという縛りがあるため、規制緩和をし、柔軟に施設を利用することができるようになれば、幼稚園や保育園は、子どもたちのために更に機能を発揮できるのではないかな。
- ・ 中学生及び高校生の引きこもりなど不登校者がかなり深刻な問題となっており、近年、通信制高校の申請が非常に多い。いろいろな要因があると思うが、集団生活が楽しいと思っていないと考えられるため、集団生活が楽しいと思ってもらえるような学校運営が今後もっと必要になってくるだろう。

【小田委員】

- ・ 説明いただいた基本構想に特に違和感はない。4年ごとに市民の皆さんから評価をいただく。住みやすい鈴鹿という意味ではそれが一番大事なことだろうと思う。しかし、観光業をやっている立場の我々からすると、外からどう見られているのかを一番気にしている。鈴鹿はモータースポーツ都市宣言をさせていただいているが、ブランド発信において、鈴鹿市が発信したいことが本当に外の方に伝わっているのか、あるいはどういう風に受け止められているのか。SDGsが求められている今、この先も含めて、鈴鹿ブランドをどうしていきたいのか、あるいは今足りないものは何なのか、外からの評価を聞いてから、作り上げていかなければいけないのではないかなと思う。住むというこ

ろで言うと、鈴鹿市から出ていかないようにするのも大事だが、外から鈴鹿市に事業所を置きたいと思われているかどうかや、あるいは子どもたちが巣立って一度は大学で東京や大阪に出ていったとしても、外から鈴鹿を見たときに戻りたいと思えるかどうか、そういう鈴鹿になっているかどうかの評価を得ていかないといけないのではないかと思う。森委員から話があったように、DXを使えば、4年スパンでなくてももっと短いスパンでいろいろなところに意見を聞けると思う。県外もそうだし、我々のお客様には外国人もいるため、外国からの意見も聞くのはどうか。F1は20数か国でやっているが、一企業でやっているのは日本だけである。他国は自治体や国など、行政が関わってF1を開催している。そうしてくださいと言っているわけではない。我々も鈴鹿ブランドの一部を背負わせていただいている、ある意味責任を感じている立場として、鈴鹿ブランドを高めていきたいし、役に立てることは一緒にやっていきたい。

【事務局】

- ・ 鈴鹿市としてもシティセールスを推進しており、地域資源活用課では地域資源の売り込みをしているし、総合政策課では魅力的な政策を打っていきたいという思いもある。今回、将来都市像にハッシュタグをつけたのはその一つで、広くプロモーションしていきたいと思っている。2025年には大阪・関西万博が開かれ、その中でもPRしていきたいと考えており、首都圏でも様々な活動をしながらか進めていきたい。鈴鹿市のシティセールスとしては21人と2チームを大使として任命させていただいている。そういった方々もSNSを使ってみえたりするため、協力をいただきながら、効果的なプロモーション活動をしていきたい。

【事務局】

- ・ 岡田委員から事前に意見をいただいているため紹介する。
- ・ 計画の作成に当たってのデータとして、全国と比較するケースが見受けられるが、都市によって構造や特徴が異なるため、似たような都市と比較して作成する必要があると考える。
- ・ 鈴鹿市は図書館の数が少なく、気軽に利用できない。子どもの読書の時間確保のためにも数を増やしてほしいという意見がPTA連合会で出ている。

(3) 今後のスケジュールについて

【事務局】

- ・ 資料4に基づき説明。

【松田会長】

- ・ 基本計画の答申が令和６年２月となっているが、当初予定されていたよりもこの会議の皆様とのお付き合いが少し伸びたということか。

【事務局】

- ・ 当初、基本計画の答申は令和６年１月を予定していたが、スケジュールを精査した結果、１か月後ろ倒しさせていただいた。

【松田会長】

- ・ 本日の事項は以上となる。次回は本日の議論を踏まえて公表に向けて基本構想全体の審議を行うこととなる予定である。

以上